

早稲田大学蔵本 「新作 おとしはなし」
翻刻ならびに注

三原 裕子

【キーワード】 咄本 三笑亭可樂 おとしはなし

凡例

一 底本は早稲田大学中央図書館蔵本『新作おとしはなし』文化六年版(以下早大本。函架番号へ二三・一九八四・二二)を用いた。略解題は凡例末尾に付した。

一 丁付けは表、裏を(一オ)(一ウ)のように示した。序、口絵、挿絵は序一オ(口絵2オ)のようにした。

一 翻刻に際しては、振り仮名や送り仮名なども、なるべく底本の様子を残すようにこころがけたが、一部は以下のように改変を加えた。

・ いわゆる変体仮名は現行の仮名字体に改めた。かたかなも同様。ただし、助詞の「江」「子」を字母とする仮名はそのまま漢字で表記した。

・ 漢字の字体は原則として底本に従った。

・ 本文中の振り漢字は、該当する本文の下に一一でくくって示した。

・ 合字は現行の字体にした。

・ 割書きの部分は《》でくくった。

・ 底本の誤記と思われる箇所にはその右側に「ママ」と記した。

一 底本の汚損により、本文が不鮮明な箇所は□で表したが、東京国立博物館蔵本(以下東博本。函架番号 ○三〇・と五六二三)によって、□の右に補ったものもある。

一 本文については底本の改行位置を特に示さなかったが、割書き部分については、改行位置を「/」で表した。句読点等には私意に加えることをせず、底本のままにした。

一 口絵、挿絵そのものは割愛したが、そこに記された文字は改行や字配り等、なるべく底本の様子を再現するように努めた。

三笑亭可樂 「新作 おとしはなし」(文化六年)について

板本(中本)二冊。文化六年刊。早大本、東博本ともに、題箋はなく、「しんさく落ばなしの序」と題する悟意鷲丸狂歌師。

新泉園、通称紀平庄之助の序文がある。半丁八行取り、一行約十八字詰。序(丁半)、自序(丁)と、見開口絵一図・半丁口絵五図、見開挿絵一図、本文(三十七丁)より成る。

内題は「新作おとしはなし いさみに／つき馬 生るい三句佐里」。「文化六己巳春発売 東都／書舎 馬喰町一丁目 山城屋藤右衛門／横山町三丁目 山崎屋宗助」の刊記が付く。

早大本、東博本(徳川宗敬氏寄贈本)ともに手ずればはげしいが、虫損は比較的少ない。『国書総目録』所載の東洋文庫所蔵、文化五年版(函架番号 VII 2 Fe 4)は体裁は小本、内容は可樂作「種がしま」(文化八年頃刊)と同様のもので、別本である。

作者の三笑亭可樂は江戸落語中興の功勞者、三題噺の元祖といわれる人物で、来歴は、師峻康隆一九六五『舌耕芸史下』(国文学研究三)に詳しい。彼はそれまで同好の士によつて開かれていた咄の会のメンバーとは異なり、「寄席の看板をかかげた最初の職業的な江戸のはなし家(前出六十三頁)である。「新作おとしはなし」は可樂三十三歳の作品で、地口を随所に用いた長咄である。

しんさく落ばなしの序

虎溪の橋二にはあらぬ中橋二の近邊に掌を打て人をあは、と笑

す仁は誰曾不問と知れ三笑亭の主例の落話を著述て是に

基緒の辯三をか記となり 応需先舛稿を聴に序一オ 聲詞よ

り決句迄武蔵鎧石流間に輩同道百韻を一部の鞭にし金轡

の別世界に遊侠の放言を狭咬たり 於茲 予翰七を染手綱搔操八

て踰々と由良之介風雅でもなく聞雜でなく仕様事なしの

山科の木幡の里二に馬はあれと君を思へは章臺三(序一ウ)

楊柳を折留公子の白馬で三通へる長堤八丁四娼家の白雪の咲

たらは告よと云ひし文使来る音すなり馬に鞍置ていよし御嫌

一五の源三位一六浮れころに乗だせは 徑へ馬曳向よ郭公一七と

(序二オ) 焦翁が逃尻管仲 雪一八に附馬一九を放して居續

の尻馬を辯慶にぬぐはすたぐひ賽翁が馬中庸を走り東坡が

兎馬耳小籠三していばふ殊に北鶩子三北風に三不歳稻舟四

(序二ウ) 画をも加へ多禮は驚高五も麒麟六に立ち春夏かけ

て管見少女童子競馬の落たらば願解給へと御退屈の埒を

明侍りぬ

伯樂 毛街脊中の隠士

新泉園 主人悟意齋丸 五記

(序3才)

抱亭北鷺画

十雨

花よりも

曼ひと筋の

こゝろから

かゞの千代

いさみ三生るい

未醒

いさみの吉

その女

五風

(口絵4才)

ある夕邊北鷺子のもとに酒のみけるにうまく酔たる折からの興
にとであるしか筆とりてやうくさまくのたわれ絵を畫く
おのれもかたはらにありつゝ、但に見て過さむも興なしとてその
絵に例のむたを書つくればあるしいよく興にいりてます
く筆とり畫くにそおのれも又畫くに随ひ賛しつひに五ひら
に(序4才)あまれるをふみやのあるしあなちにもとめて板に

ゑりものしつこれはかうへをくたきて考たるにあらすおりにふ
れてのたはれことなれはそのつたなきはおのくゆるしたま
へとまうす

三笑亭

可樂述 花押

(序5才)

壹に一座のすゝめにて

二ににた山のやくわりも

三にさじきやど馬迄も

四ツよつほと可くと

五ひるきれんから

六りやりに

七ツなんでも

八らしやれとおさしづうけたる上からは

九ツこゝな子だからも

十からかくごの我かしんていおやこ二升

わかるゝふともさらくいとわぬいも

ざしが今目のまいで見たいくと

ちうツはらちが

イヨ大黒はしら

ありがたい

(口絵5才)

ヲヤ〜

しまの

さいふだ〜と

おもつたら

わらじだ

やつさ

しかしさいふと

おもつたも

むりもねへやつはり

おあしをいれるものだ

唐人の

あひかたに

もろこし〜とは

どうもいへねへが

たんすのからには

すこしおそれる

「シタカタへの女郎は

りうきう〜たもしれねへ

「ナゼ」「ごうせびにどこがよかつた

ばかされた

てつほう見せ〜画の

せうやどの

ふみもこんく

人もこんく

しやれては

いたがさりな

がらあまりと

いへば

うつくしひ

あふかたそもじも

かの

白めんか〜イ、エふくめん此ものまい〜画の

せつないじやわいなア

「おきやアかれ又しつほを

見せる気だな

(口絵7才)

(口絵6才)

なんだ

わりやア

なまつ

ほふ豆〜か

「ウンニヤ

おらア

な、つ

(口絵6才)

ぼふづ三六天た

「シテひやうしきは

「まく引にあづけた

「どりりでらかん三五のほうで

こい四〇がが、つた

〔挿絵7ウ〕

新作おとしはなし

いさみに一生るい三句佐里二つき馬

三笑亭可楽著

今をさることいくとせかなんいにしへ一両国柳二ばしのかたほとりに春風三菴未醒四といふ雅人五あり住居のやうす表六二間半七ほどの黒べいにして右に三尺のひらきありあくればすぐにとび石八つたひ左右九萩とかんちくの植込一〇にして向ふにげんくわんよふの上り口九尺四枚の横しげのせうじをたて一一オ

春向ふ

さしの柳の

はなし本

はをあらはして

おわらひくたされ

〔挿絵1ウ・2オ〕

連理枝成

まん中は六畳一のざしき二おくか勝手三でおもて座敷四は四じやうはん庭五は冬木六のうへごみ松七の一ト木八をしんにして地九ざう形一〇の石燈籠一一いつたいにわのさびあんばいせきしうりう四一二の茶が、りと見え四じやうはんの入り口には大雅堂一三の墨跡一四感鬼一五開四と一六いふかくをかけ床には大徳一七江月一八叟一九の一ぢく爐二〇に古天明二一のあられ釜二二をかぎにてつりすみたなにはこはぎの茶わんにかきつばたのかざり二三（2ウ）つけあるじは四十三四二四と見え尤二五ていはつしていまださめずといふこゝろにて名二六を未醒二七とあらため画二八をわざにしていつたいはいか二九いずき三〇なりある日惣金三一おしのふくる戸三二へ西感寺三三古潤三四の草画三五の人物三六をゑがいてるところへほうゆうと見えて里野三七錦川三八といへる医者三九へはをり小そでともにくろちりめん四〇のあかみはしつたやつはいり□□みへてふとわのうちへけんかた四一はみ四六四二にちうとんす四七四三の帯も市松四四つなぎ四八四五のものこれ□□のをしめもめんうらのはつち四九四六にゑまのきつねといふ色のたび五〇をはきまへはなをくすべかか五二でたてなをした一枚うらのばらをのぞり五三五四わきざしはみちかい上下五五きさみのろういろさや五三五六つかはちや糸五七でまかせさめも二のきれ身は十本からけて（3オ）十六文ぐらいのやつほんのねこおどしく

ろちりめんのらんうづきんきいろいこへでちかめなり両そでの
はしの所をチヨイトおつてちよこくとあるきしゆんふうあん
のかど口から未醒さん御ざいしゆくかね「主人 これは錦川
大人そのごはとんとおめにかゝりやせんがおせかいはどうでござりやす
錦川 何かもしならばがおかのおしやう^{五箇}しやア御
ざりやせんがひとりともし火のもとに文をひろげて見ぬ世の人
を友として^{五た}のしむのみさ「主人 よふござりやすそこがふうりうで「錦 トキニ 御かないはいつれへ」主人 これはもんじ
ん「門人」(3ウ)にいざなはれてかたせからゑのしま^{五美}のほふへま
いりやしたそれゆへわたしも僕のおやじばかりでおふきにつれ
かくでござりやす「錦 それはおさむしうござりやせう時に今日は
おはいかいのおもよふしのやうにうけたまはつたがさよふかね
「主人 さやうさくわいいたすやくそくには申やしたかみな
まいればよふござりやすが「錦 みなまいるやうな□□^は」
しで御ざりやした「主人 けふはもしきめうな□□^は」
「4さなしがござりやす此近所のいさみといわれる人で御ざりやすそ
く^{五天}にかの思ッばら^五といふやつでねこれはいかい大しうしん
で今日附合の席^五を見たいと申てのちにまいるはづてござり

やす「錦 ハテそれはめうたる^五君子^五ねト《きいろいこゑては
なしている所へ池のはた邊のはんくわつう^五「五風^五」今一人は「十雨
トテとしのころ 廿八九色はきみゝわるく白くほそおもてにては
なはだおそれるといふこふうな口くせ有^五何をみてもはいかいだ
くといふ大のきざものつくりごゑてものをい、じゆばんのはん
ゑりばかりきになっているつうじんないしやう付は下ぎがふじ
ねすみ^五前のおらんだもじ^五五の中がた^五あい着はす、竹をのこま
かいかんぜ水^五上着は黒はぶたへおびはきんもうる^五光のわるく
ひかり羽をり黒な、こもなれどもん所がく4ウすがぬい^五で
かましき梅はちぢゆばんもあさぎちりめん^五で両袖のひのトつぶ
かのこま^五はよいがおし^五いかなくるびろうどのはんゑり^五野右衛門
にか、せた^五壺分金のぬのめ^五の扇をまへ江さしばつちしりは
しおりみぢかいおたちでずさんをありまきにしていやみたつ
ふり女のほうからすいた所は二分もなし五ふうといへるはん
くわつうもおなじとしかつこうせにかねもそうほうにたちま
わるがゝわるいくせで人をおひやつては何かのわりまへを
おこなひたがるといふわるじやれものそのくせ^五えんもない
晝画のくわい席^五西なぞへ出ては

よく六哥仙なぞの／より合がきなぞをさせたがり京傳や三馬セウなぞを見てはさきでしりもせぬにチヨイトもくれいしたり一寸したことにもしやりん玉たまだのこ、が／きやうげんの山だのこくう毛けによこくわへゑな芝居つうをい、たがる人みなりの／よふすは御すいりやうくださる／べしふたりそろつてげんくわんより」先生御さいあなかね「主人これは両君子くんしおそろいでいま金川きんせんさんとおうわさをいたしておつた所だまづこちらへ「遊 へちか目ゆへよく／見で」(5才)イヨウこれは両君子の御出みでありがたい誠まことに有友ともあり従遠方ほうよりきたる 来亦不楽 十雨 どうだ金川きんせんらうその後ほとんどおめにか、らん「五風 先生此間まきまはおまへのおかちだッけい物もののけつかうくわしはとッきやしたか「錦 もしく／あのけいはふねいハちう取りそこで主人あいらずそく座錦川がたへときているてね「十雨 へうちへいきをひく／よふなこゑでありがたいそこがはいかいだ「主人 これはめいわくなことに(5ウ)あふものだ(ト)はなすおりしも／仲町なかつまちへんのつう人」「招留せうりゅう 年のころ(三十二三はをり小袖／ともにとうさん帯は／あついたのとつかり形かたちハ三せいびのまへさげわざさしも長さ一尺七八寸つかはたかの／へを

でまかせさめもちゃんば八四いふやつ目ぬきは利永りえいのほつた月にほど、ぎす／ぶちまかしらんは安ちかゝ作にててつこのひくいやつにいろ画であじにさき／つばはしやくとうのはみ出しさやは花かいらぎらぎにて身は井上しんかい／ちよつと見ても三四十兩くらいにふめるやつをさししんしうそめの茶のわた／をゑりまきにしてすましかほにかど口から」未醒さんおやかね(トせうじを／あけて)イヨウこれはおそろいの風流士ふうりゅうし先生せんせいどうでござりやすさだめしおはいかいの事だらうまつおもしろ山のほと、ぎすんとふるくいたしやせう「十雨 ありがたい 其古イ所が(6才)はいかいだ何んぶんおそれる(ト扇の中ひらきを口へあて、／左りの手をうしろへついている)「主人 招留せうりゅうさんけふはまたなんとおぼしめして「招 イエサきのふ木村やトさがみやのぬんきよ「隠匿いんごく にさそはれてみやうけんハへ亀かめのがくを見にめへりやしたら町まちのてやいハ九にあつて大おん寺まへの温泉場おんせんばへひつばられてそのおちが九一夕部せきべ鶏舌けいせつ九一ときしのそのうちふねをこしらへさせのいまむかふへ(6ウ)あがつた所さ「主人 おもしろい／「招 もし五風さんいつもきれ

いことだねかつらとい、いせうつきとい、なんでもとうじの三津五郎といふものだ」「五 ありがたへわたしがみつ五郎はうへ江イヌトいふ字じ齒かつきやすがおめへはまた栄三九五ト源のうめいを梅花のあぶらせせであげものにしたよふだ」「十なるほど此あけものにはせかいぢうの婦人かぜひのぼせる事だろう、何ぶんおそれると」「主人 時にマア酒といふつはもの丸をやとい(アオやせう「錦 それが何よりだね」「十おしやうがどうもまたのみたがるテ「錦 イエサならばかおかのおやぶんも下戸げこならぬこそ丸おのこはよけれとほめておいたわな(トきいろな(こゑでいふ)「招 時にこう一盞はわたしが取りにやりやせう」「主人 これはかの古時鳥だね」「十ありがた山〇〇といふこ、ろかね。なる程そこがはいかいだ「招 御けらしいしゆは」「主人 ハおりますコレ 治介や(トよばれてかつてから)出るおやじを見れば年は六十四五ト見え松坂じま〇〇のせんたくぬのこに白イいわつきくらの帯〇〇をメもつともはなは手ぬぐいのふるいのかみたはこもてまへできつてのむト(アウ)いふたちにたばこ入のかんのとれたのをまん中の所をこよりでいわへンて〇〇ぎげ。かみはこましほのよふなやつを油紙たくさんにつ

けもとゆひもたんときついでわらつた事もうそをついた事もない(すこしみ、とをいおやじまじめなかほて主人の前へてつき)「治よばしつたかね」「主人 何か招留さんが御やうがあるとおつしやる」「治 せうりやうさま〇〇をどふいたしますね」「主しやうりうさまじやアねへ招留せうりさんがおたのみなざりたいト「治なんの御用でござりますね」「招 (すこし)大きいこゑで)「コウおやぢどんおめへ喜八をしつてゐるか」「治喜八と申まするはねづみのちをすいたがる(8オ)ものでござりませう」「招 んんにやよそりやアいたちだ大坂喜八〇五よ」「治そんなマじません「招そんなら川口〇六はしつてゐるだらう」「治そんなおふじじております王子から「リ〇七ほどさきで御おふじります」「招これはしたりその川口じやアねへやげんぼり〇八の川口よ」「治あそこを川口と申所か御おふじりますかね」「主ソレこのぢうてめへがむかひにいつたツけ三みせんひきの可良〇九がとなりよ」「治あそこを川口と申する(8ウ)かね。どうりでそのこつちらに善ぜん光寺様こうじが〇〇何かござります」「主なにさあれはこんぴら二二だ。とうも子ぞうがおらんからつかいがふじゆうでとんとこまります。そんならてまへのしつてゐる横山町よこやまの魚文いさな三三三いつて来

たがい、「招コウ おやちどんそんなら金きんを二夕切ニシキもつていつて文治になんぞくへる物ものをよこせといつて下せへ《トかみ入より金をノほうり出す》「治チむかふがりやうり茶屋ニ四だからそんなことを(9オ)いふはためでござりまするだまつておつてもくうものをよこしまする」招シヨウそれはそうだかなぞおつりき二五なものをよこせといつて下せへ「錦キンおてへぎニ六ながらはやくたのみます「治チてへきでもハヤしやう事が御ざりませんとふせうハクに出てゆく入かはつて「イサミイのうてん吉《せいはい人なみより高くうすあばたかありて目のぐりく》とした色のあざくろい年はノ三十二二ト見へ丸ひたいのすりたてかみはぬひぢりみけんの所にきづかあるゆへあたなをのうてん吉五郎といふなりはゆうきもめんニ七のひろ袖ニ八にやはらかノわたを入袖ウはくろな、こをふかくかけ黒ク糸イおりの帯ヲめてはんしを四ツノおりにしてはじめの所をチチヨイトおつてふところへ入さいふのひもをゑりの(9ウ)外へ出してかけめくらじま二九の八寸だるみのも、引両ヒキこくの亀カメやニ〇で壹歩ヒツ武ブ朱シュ一本くらゐいか、つたやつをはきねづみのはんぐつニ三にふじくらぞうりニ三でそろばんしほりニ三のてぬぐいニをわしつかみにし

てかど口ノからおほきなこゑで》「モシ先生さんおやどかねト《いきりなりにノせうじをあけ》「主ヌシライ吉さんかサアお上り「吉おとりこみならいつてさんじやせう」主ヌシナニサ御ミゑんりよなしうじやアねへよおまへのおこのみの百ヒャクゑんのもよふしだ「吉百いんと申ウやさア向ムカじまにゑんきよしていた二画ニのじやアごゴへせんかね「主夫ヌシウは白ハク猿マンだけけふのはソレはいかいの百ヒャクゑんさ「吉キチへエつちらん(10オ)つらでおめへさんがたのなかまへへエツてニ五へへけへニ六をやらかそふといふはモシよくく深フカイイ百ヒャクゑんじやアだね「主なるほどト《わらつてノいる》「吉どなたもモシわつちやア吉五良と申ウやすがぶてうほふものでござりやすヲツコロやすふニ七おたのみもふしやす「錦キンアイイサアごゴゑんりよなしにこちらへおめで「吉キチふしつけながらおめへさんはべらぼうに黄ワウイロイこゑだ子今の内にしゞみミのつゆでもニ三あひなさればい、わるくするとおツ(10ウ)つけめまでいきろくなりやすぜ「主ヌシおふだんやみしやアあるめへし《トみなくノわらふ》「錦キンもしさつきのおはなしのはぬしかへ「主ヌシさよふさ「錦キンぬしのすがたではいかいしうしんとはありがたい誠マコトに此人コノひと而有シテ此病コノヤマトだニ五「吉キチ《むつとノし

て「もしなんだこの人によまひがある。わつちやア口でもくそふざりやすかね」主「これはしたりあれはおめへをほめなさつたのだ」吉「ほめるにしちやアわりいほめやうだアまだはやいりくつが(一1オ)やめへかあるならあるやうにかけへひきまはしてサテきさまはやめへがあるならあるさ」子「そこでさんきれい」三「でもものまつせへトカとうじにでもいかつせへとかかげでいつてくんなさりやアありがてへがなにも人の中で此人にやめへがあるトいつてくんなさる事アありそふもねへもんだ」おもひやす「招モシくいまのはおめへをほめなすつたことばだから」吉「エイそういふりくつなら何にもわつ(一1ウ)ちがむつとするわけもねへからその百いんとやらをおはじめなさりやし」(此うち五風十雨はかほをみやつてないしやうでくすく笑つてゐる)「主 時にてん 一点は一ツ目にしやせうか天神」三「へやりやしやうか」錦「あんまりひねつた口をきい／＼て大きにしらけていたりしがまたさし出」こりやアぜひ天神がよふこさりやせうねへモシ」五「ト さよふさく」吉「モシ天神だの一ツめだのといふはなんで御ざりやすね」主「どちらもはいかいのそうしやうさ 一ツ目が湖中」三「天神(一2オ)が得器」三「吉

その得キとやらがいゝのかね」主「なんでも江戸ではマアとくきサ」吉「ヘ」なんて得器かアたかたといふしやれかね」主「しおまへは地口はきつい」三「ものだがはいかいはどういふもの」だの「吉」といふ物だといつた所がマア「おはなし申さねへけりやアわかりやせんがきよねんの三月からことしかけて三ツほどこしらへやしたが元のおこりからもふして見やせう(一2ウ)がこういふりくつさ去年の三月十五日べらほふに日よりもよかつたがわつちも」ト「ねへつまらでうちにねていやしたのさ」主「ねへつまらト」吉「やつぱりつまらねへといふことでござへやすがおめへさんがたのめへでつまらねへとぞくぶつにいつてもおかしからひねつてねへつまらともふしたので御せへすが」それからマア「おき、なせへやし(一3オ)わつちらんほうのとうきりまちにまごといふやろうがござへやすがそいつがきててもふしやすにやなんだてめへ此ひよりのいゝにまつりのつけへた」三「牛をみるよふにねている事アねへいまつからむかふじまのほうへいかねへかと申やすからふたりで出かけた所がほぞは」ト「すいてくるけたアなし」二人ながら唐人のおいど、いふものだからぐわん(一3ウ)にんぼうずの初山じやアねへが」三「お

さまりやせん「主 モシそのほぞがすいてけたがないといふは
「吉はらがへつて銭がねへといふことさ」主 なアるほどそし
てそのとうじんのおいど、いふは「吉からッけつといふ事サ
「大ぜいなるほどからッけつはありがてへどうもいへねへ」十
なるほどまたべつせけへだなんぶんどうもそこらがはいかいだ
らうへト又おかしなこへで／＼きざがらせる」吉そのあとを（一
4オ）まあお聞なせへけいぶんわるいはなしたがふたりのたは
こいれをはてへて三毛見た所が四文銭がたつた十一文あるとい
ふやつさそれからわつちが土手でいもをやいている三毛はアさ
まアくとひて四文つ、のいもを十二本まけてもらつてひとりめ
へ六本づ、くいのちやはたゞといふもんだからどんとたべやし
たそれからほらもせうぶになつたから梅若（一4ウ）さま三五を
ひやかそうとおもつてみやのめへ「江しやがんでツイソレ ちゑも
なくいもくらつたといふもんだからおならをぶつとひとつやら
かしやしたスルトそばにいたるたほ「四」やなにかがべらばふにわ
らひやがるからわつちもすこしむつとしたけれどもそこがこつ
ちがへへけいしだといふはらがあるもんだからこういふ句をや
アつけやした「梅若でぶつとへの（一5オ）出る山ちかなサ」主

それはおまへおきなな句だに梅か、に「四」のつと日の出る山路
かなトいふがありやす「吉そんならもしこいふのはどうでこ
ざりやす去年のなつわつちらんうちで六七のかや「四」の中へ十
二にんねやしたのさもちろん蚊屋もまんぞくなかなやならい、が
壹尺まはりくれへのあなが三ツ四ツあいていて蚊どころじやね
へとんびやだちう「四」がすきに出はいいのできる（一5ウ）かや
だけれどもほんの蚊おとしにつつてねた所が蚊といふやつア
芝居のでんぼう「四」とおなじ事で穴せへありやアどけいでも
「四」とび込といふやつだから夜ツひてねたりおきたりばかりし
ていやしたそれからわつちもこういふ時か へエケエ だとおも
つてコウ やらかしやした「おきてみつ「四」ねて見つかやのせまさ
かな「錦い、くせまさかなはありがてへ」招 加賀（一6オ）
の千代尼がねてみつかやのひろさかなといつたやつだの「十あ
りかたいテ どうもこ、がはいかいだらう」五しかし千代尼はひ
とりねのさむしいしやうだね「吉 わつちがなアまたいたつて
ねぐるしいしやうだてね「招 ありがてへく「吉 此頃イ、ノ
ガ 一ツ出来やしたわつちらのきん所へうなぎ屋「四」の新みせが
一ツけん出来やしたのさ。スルトまたその孫といふ（一6ウ）や

ろうがきやアがつてどうだ吉やうなぎやの見せひらきがあらア
くいにあゆびやな「買おれがところになまが一本買九あると
い、やすからそいつアおもしれへッ一本ありやアあとはひちを
きめてくるとふたりでくいにめいりやしたところがうをも北なう
らのうをで「五油はちつとすけねが買「五すいぶんうまう御ざり
やしたア（一七オ）ところがその孫といふやろうめへうぬがぜ
にの一本も出したもんだからこいつアべらほうにあじがわりイ
トもふしやすからわつちがいふにや。そんなことをいふなてめ
へッちやわけをしらねへッはや買りくつがうなぎだといふ物ア
どんなにい、うをつかつてもはじまりの内アうまくねへッま
た。どんなにあじがわりッてもさんま（一七ウ）のひものをくう
よりやアよかるうッわつちやア申やすにやアねへコリヤアまた
おめへさんがたのめへではッかりなもふしぶんでこぜへやすけ
れどもうなぎやと女郎といふものアつぼがよくなかつちやおも
ふよふにやめへりやせんその時とわつちがやらかした句くかナニサ
氣にいらぬあじもあるうにうなぎかなこいつはどうでこぜ（一
八オ）へます「主おもしろいがおまへのはみな地ち口くちだそれも氣
にいらぬ風もあるうに柳かなといふ句くがありやす」十しかし先

生地ち口くちもさいがなくては出来やせん「吉さよふさおめへ地ち口くちと
おりはアさいがなくつちや出来やせん「錦にしん ときにびせいさん
「五」おもて「五」は此間のをもちひてけふはうらのおつたてから
やりやせう「主さよふさく」吉うらアおつたて、（一八ウ）
もちでもなけなさるのかね「主ナニ せいふわけではないさ
「招しゆひつ 執筆しゆひつ 五風はマサ五風さんだろうね「主これはぜひ名筆めいひつの
事なればね「十二、はさしづめ五風さんサ「五」紫むらさきはきた
めを見るよふにだんんくそばかりもちやけられもありがてへ
ねトぶんだいに向ひゑいそト「五」を一まいあけて「執筆しゆひつ 窓まどをも
る月をあかりにわら仕事。おちこち（一九オ）きこゆ鴈かりのこゑ
く。まだ秋「吉なんだか唐人とうじんのゑんどうをわたすよふでね
つからわつちらにやアわかりやせん「主しゆんじゆ 春秋は三句くツく
「五」からこ、でおまへがなんぞ秋のきをいれて句く作さくしよふとい
ふものだ「吉すんなら一番わつちが秋のきをいれてくさくやつ
つけやせう。もしきぬかつきのいもをくつておならをしちやア
どうでござりやせう「主何サ（一九ウ）せいふわけじやアねへ
「錦にしん しからばわたしが「名所なせうののみち見みて行いずだニ「五」のどく
「執筆しゆひつ 五へゑいそうへくうつす」「吉先生さんすだとはなんの

事でござりやすね「主 ずだとはあんぎやの事サ」吉 あんぎや
たアつりかねなつからしゆもくをもつて「五 出る物じやござ
りやせんか」主 ナニサ それははんにやだ「吉 此あとはやつば
り秋かね」主 あきはもうこれで三句（20オ）つゝいた「吉ま
だモウいつへ」くれへは秋ののびが生まれせう「主 なにサはいか
いにはひなぞといふはないこんどはまたもみちについたこと
をかながへなせへ「吉 へ」もみちにせへつけばなんでもよふご
ざりやしやうね「主 そうさく」吉 こいつアぜひそふありそ
ふなもんだ唄にせへもみぢかことならなんでもよござると申
やす「主 モシく吉 さんその地口をい、ッこなしに（20ウ）
チトまじめにかながへなせへ「吉 へ」しばらく／＼かながへて
もしこういふなアどうでござりやせう「鹿ぼたん大かめ枕かう
じ町。こいつアよふござりやせうかうじ町のけだもの屋」五へ
いつて御ろうじやし鹿のそばにア大かめがまくらをしておりや
すすしておめへ鹿のことをもみちの御吸ものといふから
い、じやアござりやせんか「十 なるほど大かみ枕はありかた
い、そこが（21オ）はぬかいだろうどふもきみやうだなんぶん
おそれる「主 しかしどうもそれでは句か長イ」吉 そんなら天

地でつめたらとうでござりやせう「招もしわたしがいたしやせ
う」おもかげばかり道哲「六 がはか」吉 とうてつといふのはな
んでござりやすね「主 ソレ十手のとうてつサ」吉 なるほど
高尾のお寺「七 たい子」こいつはどつてつにおもしろへ「主 いたし
（21ウ）やせう」出つ入つ恋のみなどの火な箱「六 四」吉も
し恋のみなどとはどこの事で御ざりやす「主 どてのどふてつ
のわきへ吉原かよひのふねが出たりはいつたりするからそこで出
つ入つ恋のみなどの火な箱ことしたのさ」吉 おことばちうだ
がこうしちやアどふでござりやしやうどうてつは高尾の上るり
にあるからときわづ「五 六よりもあたるな」六六とみ（22オ）もと「六
ト やらかしたらどふござりやしやう」主 夫てはまた句がみじか
い「吉 一ツぐらいはとぼけたふりでいれてもい、じやうアござ
りやせんか」主 とふもそふいふわけには又いかん「吉 せん
のは長しこんどはみちかしこれがほんのながしみぢかしま、な
らぬトいふものだこんどはなんでかながへたもんでござりやし
やうね」主 こんどは恋でいきなせへ（22ウ）「吉 また長くや
らかすのかね」主 こんどはまたみぢかくサ「吉 へつほど
かながへて」もしい、のが出来やしたこふいふのでござりやす

「恋にさへ長いもあればみじかいもあるは八百屋のお七なりけりトハチトながすぎるかね」「主それは長イどころ□はなはなそれでは狂哥だ「吉 狂哥ならそのわきへはきだめとつけたらよさそうなものだ」「主 なんでも恋についた事をかん(23オ)がへなせへ「吉 こひについた事なら「コウヤらかしちやアとふだろうね」「はなずうくとこいふねでめしトハもししい、じやア御ざりやせんか」「五 ありがてへ〜こいぶねでめしはぬきだ「了エ 主人此間かさいと申ても恋になりますか「六」といつたがやつぱりこ、らだろう「十 いたしませう「ゆめをやぶりしほど、ぎすなれ「吉もしおことはのちうだがほど、ぎすじや(23ウ)恋になりやすめへ「主 これはしたり夢はずいぶん恋になる「吉 ゆめが恋になる「ユ ぶりで山のいもがうなぎになりやす「二 六 ねト「いろくくはなして」いる所へおやち魚文よりかえりしゆくく着をいだす「主 サアせうるさんおあつらへのさかなが参やした「錦 ホ、ウ 何かうまき物つくし「モシ こちらの三ツ物「よはなんでござりやす「チヨ イト けんじたところがまづなんさんの五すのはち「七 になる(24オ)とだいに「七 になながいものきんとんだねそのわきがこうはとのほちにもうそうのうま□にあわひの

やはらかにだがとちらのけんばんのどんぶりとおほしき物はなんでござりやす「招 角松露のふきみそあい「七 ざ「吉 此もしせうるといふやつ「ア なんとくうと□が松やにくさくなつてなんの事アねへくま坂長半の二面けつウ見たよふになり(24ウ)やす「五 い、くくまさか長半のけつは十五でんだ「招 さあ〜もしゑんりよなしにおあがんなせへ「主 もしきん川さんろう石のはちにかきだいと鯉のまきつくりはきみやうだね「招 つけ合「セがどうもいのちだ黒くわいのくらかけにさ、がしうどにうみそうめんいり酒にわさびせうゆは五分もすりねへ「錦 そして(25オ) かすいもがやきたいらぎにわらび「チヨイト 木のめはいのちく「吉 もしとれもうまそうだがいれものがしみつただね「主 ナニサどれもけつかうだ「コウ 見へても武百疋より安イものはないのさ「吉 それじやこいつも夕立にあつた山ぶししやアねへがかいかふり「五 だアわつちらんおやぢは五六年あとにくらまへの天王(25ウ) ばし「六 までひゃやき「七 のちやわんへすゞでもんをつけたのを二十六文でかつてめいりやしたがあいつらアほり出しものだね「主 それはまた物がちがう「吉 まるツきりちがつた所が土でござりやしやう「主

土は土さ「吉それごらうじやしいくらよくッても土だアこれか
ら見りやア一ツへつついの三百五十は(26オ)かつこうのもの
だねへもし「主時にわたくしからまづはじめまじやう「吉
リヤアモシだしつこかだれぞおごりかねこんな事アよくきめて
おかねへとあとでかれこれがあつてはげえぶんがわるうござり
やす此めへわつちがたい師さまニ夫からけへりに町内のこゝろ
やすいものに山したニまであつたらかしらしるこは(26ウ)と
ふだ気がねへかと申やすからおごりだるうとおもつて十一ばい
くらつたら内へけへると八十八文ぜにをとりによこしやしたこ
つとらア又八十八文ちばらでくらうくれへなら四文をこなから
一八〇に湯どうふ一ツがよつほと気がきいていやさアそふいふも
んだからけふらニのものおごりてがありやアおごりての(27
オ)あるやうにたべるしわりまへならわりめへのよふにあとで
しよくしやうするまでもがまんしてたんとたべやさア「主
インヤけふのはせうるさんの御ちぞうだ「吉せうるさんの御ち
ぞうならはすのいゝにでもなさればニいゝ、「五ニは(まじめ
に／なつて)夢をやぶりしほど、きすなれとよんでいる「吉モ
シわつちらアなんにもしらねへが(27ウ)こんなにおこりなす

つちやアながくはつゞきやすめへむかしからのたとへにおこる
へへけへ久しからずニと申す事がござりやす「トちぐちまじ
りにちうの字をなら／べニ八四ているところへむくるん寺のほう
じやう／としのころは八五六まゆげもしらがまじりにあさぎ
／のきれをゑりまきにしてくゝりずきんニ八五でわかたうぞうり
とりと／つれ門口から「方丈先生は御ざいしゆくかな「吉
《しやうじを／あけて見て》モシせんせいさんちのいけのかつ
ぱといふまつかなりのほふずがめへり(28オ)やしたおふか
た釜カマじめニ八六だるうすだつてけへしやしやうかね「主ナニお
らんうちへはかまじめはこないが(ト)のぞひて／見てこれむ
くろんじの方丈ほうぢやうおさむいのによくおいでなざりましたサアまづ
こちらへ「方サア先生おふきにごぶさいたしました時に先達せんたつ
てあひねかひましたお画えは出来あつたいたしたかナ「主エイさく日記
ぬをはらせました(28ウ)がいづれりやうもんじつ画三日のうちには出来い
たしますまづチトお上りなされまし「方さよふなら御めんなさ
りましトウへ江《あがりずきん／とつてホ、ヨ》これはどなたも
おはいかいでおたのしみなされますナア「錦これはおいでなさ
りましと《かほをよく／見て》ほうちやうにはモシどちらで

かお出合イもふしたとそんなじましたが「方 ハイさよふでござり
ましたかな ナニカハヤモウらう(29オ) ねんでござりまして目
はわるしみ、はとをくなりますとんと人さまを ヨウおぼへませ
ん「錦 お玉が池で詩会のせつ(28セナ)「方 ホウ引これはおふき
におみそれ申ました「錦 御もつともく時に方丈にはハンニ
ヤトウ「御酒 はいかゞでござります「方 ありかたう御ざりま
すがまことに此せつは葦酒不免山門入(28ハハ)を「錦 なるほど御
きん酒かね「招もし(29ウ) 五風さんわたしが久しいあとに
酒ばかり山門ゆるせ花の山といふ附ケが大ぶとをりやしたが
やつぱり爰らだね「五 さやうサく「吉 そりやア、がおさ
かつきは チツト おはやくおたのう申やす「十 せんせへどうもあ
まりさつばつてはなはだどふもなんぶんおされる テ「吉 水車
のさとと 盃ははやくまはらねへのはいせへがねへ「主 イヤホ
ンニ方丈(30オ) 御酒をめしあがらずはお茶を上(29ケ)ませうかと
《さはくとうす茶をたて、出す》「方 これは御しんはいと
ノム「主 もしほふ丈にお目にかけるものが御ざります ハユト
《かたへからきりのはこにはいつてゝいる牛のかうばこを出し
てみせる》「方《とつて見て》「ホラ これはよいものが御手にい

りました古ビあんばいと申シこくぼたん(28ハハ)はおもしろう御ざ
ります ハユ「吉 とんだ事をいわアおしやうさんろくに目が見
えねへそふだソリヤアモシうし(30ウ) で御ざります「主《吉
が袖をひるて》これはしたりうしの事をはいかいのほふでは
こくぼたんといふ「吉《きもをづぶして》ハユいつから名が
あらたまりやした「主いつから名がかわつてたといふ事はな
けれどもすべてはいかいのほふではまづ猿をよふこ鳥(29ウ)とつ
かふよふなものでこちかぜをきやうたらう(29ウ)といふ梅を好文
木(29ウ)あるひはまたこむそうを馬ひばりなぞと(31オ)いふよ
ふなものでうしの事をこくぼたんといふもこれには深イわけの
あることだテ「吉 なるほどこもそうを馬といふのはソレこも
そうをぶつくるけへしたよふだなど、申シやすから マア馬とい
ふもまんざらむりなこともねへよふだがうしのことをこくぼた
んはといふはおかしいよふで御ざりやすこいつアもしてんげへ
な(29ウ)三人にアしれやすめへそして(31ウ) あのおもてをくるま
をひるであるくやつなんざアなんほうしをせうへ(29ウ)にして
いてもそんな事アしりやすめへそれでもこの序をかいたさぎま
るなん(29ウ)やもやしつておりやしやうね「主これはまたずいぶ

んふうりうな人でそしてとをりもの二九五だからそのくらいなこ
とはしつてゐるのさ「吉わつちがまつりを見にいつた時(32
オ)ア、こくぼたんがだしをひゐて来たなぞといつたらきもを
つぶしやせうとへはなしいる／おもてへいさみ吾人てつぼうが
しのかへりと見えてしみつたれな／あやしいなりのおとこを
つれてきたり」もしおめへさんの所に吉のやろうはおりやせんか
ね「吉だれた孫じやアねへかべらぼうめへチツトめかり二九六を
きかせてものをいやなこかア二九七かりそめにもへへけへの土場
だアそこへきて人を吉のやらうなぞとすじけへ二九八によび(32
ウ)出されちやアうすげえぶんがわるい二九九として今じぶんなん
の用だ「孫外のこつでもねへが夕部つりがねやへ権とげたや
の政が中なをりて九ツすぎまでくらつていた所が内へけへるに
アおそしそれからむやみにらしやうもん二〇〇へぶつくらはした
所がやらうめへくらつたいきをひでやみと二〇一いつきん／や
なにか二〇二とつたもんだからなげしをさげて(33オ)まだ四本
たりねへときていらア夫からけさ馬アつれて来たといふでいり
よ二〇三したところがちつとまちがへてたんぼておほきに馬をぶ
んなくつたアそういふ所へたまくらやの源や米やの七が来てだ

ん／＼わりをつけて二〇四マアこんた二〇五もりやうけんして壹メ
六百の銭をとりせへしたらよからうからふしやう二〇六さつせへ
てめへもまた四本ばかりなまのさんだんの出来ねへこと(33
ウ)もあるめへからきれいにこしれへてやるがい、とわけがつ
いたもんだからとんなことをしてもあいつがはなれねへそれで
てめへをさがしてきたんだア四本さんだんしてくりやな「吉ば
かアいやな四本のなまができるくれへならこ、のうちへ来てへ
へけへをやつつけちやいねへ四本の事アおるて四文もできねへ
「孫これてめへだつてもさん(34オ)だんのわりい時にやア
おらんうちへ来てうかばねへふな「船 ゆうれいをみたよふに
四百かせ／＼二〇七といふじやねへかそんならてめへこ、のうち
でかりたつてもこのくれへなたてひき二〇八はしてもよさそふな
もんじやアねへか「吉立引だの横ひきだのとゑんにちでうるけ
ひき二〇九じやあるめへしそんな事アしらねへそして手めへツチャ
なんにもしらねへがへ(34ウ)けへしのうちじやうしのこと
をせへこくぼたんといはアそけへ三〇もつていつてともだちか
馬をつれてめいりやしたからなまを四ほんかしておくんせへ
とぞくぶつにいわれるものかよくつもつて三〇みやナ「馬さよ

ふでは御ざりましやうがどぶぞおたのみもふしますわたくしも
 けさからほふくあるきましておふきに(35ウ)なんぎいたし
 ます「吉なに、しろまあきいて見てやるべしづかにさつせへ
 げへふんがわりいヤイ 見るもんじやねへみんないりねへかこい
 つア水をぶつかけるぞとへうちへはいりむくく馬とい、か
 ねている」主 吉さんいまのそふくしいのはなんでこざり
 やす「吉 ナアニ わつちらんともだちの孫のやらうがソノナニサ
 馬をつれてめへりやしたのさ(35ウ)「主 ナニまごが馬をつれ
 て三どふしたのだね「吉 イ、エつき馬でござりやすがとふし
 てもたッアその馬がはなれやせんのだそれについておめへさん
 チツト おねがいが御ざりやす「十 イヤそれはたいへんだまごに
 馬がついたのならてうどよい所だほうじやうをおたのみもふし
 てはなしてもらひなさるがい、うちへ(36ウ)またかけこみは
 しませんかねこれははなはだおされる「吉 ナニうちへはいるこ
 つちやアござりやせんがマアひとつほうじやうさんにそふもふ
 してみやしやうモシほうじやうさんいまおき、なさるとをりの
 わけでござりやすがどぶぞおねがいもふしやす チツトむりな御
 むしんでござりやすが「方 まごが馬(36ウ)をどふしたの

だナ「吉 たんほてべらほうにぶつたそふで御ざりやす「方 そ
 れはおふかたまごがわるいのだろ馬といふものはよくものを
 してつしうねんのふかいものだからきつねなぞのついたのとは
 またちがう「吉 ソリヤア おめへきつねとはおふちがへてござ
 りやすどぶぞはなしてやりてえ(37ウ)もんでござりやすが「方
 イヤわしも人をたすけるはやくめじやきつねのついたのなら十
 ねんでもさづけければ三三はなれるもんじやどうも馬のついたの
 ではそれは千部三四でもさつけずばはなれまい「吉 ナアニそん
 なてをもひ三五のじやござりやせんたつた音歩(いちぶ)さづければしき
 にはなれやす

文化六年己巳春 發兌

東都書舎

馬喰町二丁目

山城屋藤右衛門

横山町三丁目

山崎屋宗助

注の参考文献は(一)でくくった。ただし以下については略記を用いた。

- (江戸学) Ⅱ西山松之助他『江戸学事典』昭和五九
(演百) Ⅱ河竹繁俊他『演劇百科大事典』昭和三五〇五八
(大江) Ⅱ大久保忠国・木下和子『江戸語辞典』平成三二
(諺語) Ⅱ藤井乙男『諺語大辞典』明治四三
(砂) Ⅱ山中共古著 中野三敏校訂『砂払』(大正一七)
昭和六一
(俳諧) Ⅱ伊地知鐵男他『俳諧大辞典』昭和三三
(俳文) Ⅱ尾形仂他『俳文学大辞典』平成七
(浜地) Ⅱ浜田義一郎『江戸文学地名辞典』昭和四八
(前) Ⅱ前田勇『江戸語大辞典』昭和四九
(三好) Ⅱ三好一光『江戸語事典』昭和四六
(守) Ⅱ喜多川守貞著 朝倉道彦他校訂『守貞謄稿』(天保六〇慶応三) 平成四
(文様) Ⅱ視覚デザイン研究所『日本・中国の文様事典』平成二二

上記以外に、『大漢和辞典』他を随時参考した。引例の出典は

その書名を挙げたものもあるが、始めに掲載したものに限って作者名・出典・刊年を付し、再出以降は出典名のみを示した。

引例のうち、『一雅話二笑』『東都真術』『十二支紫』『絵本珍宝舛』『扇子売』『落駟鬚懸鎖』『磨煎茶吞嚙』『雅興春の行衛』『滑稽好』『詞葉の花』『新作徳盛嚙』『新作昔はなし』『種がしま』『百面相仕方はなし』『富久来多留』『無事志有意』『身振嚙寿賀多八景』『わらひ鯉』については武藤禎夫編『嚙本大系』に、『伊勢物語』『浮世風呂』『西鶴集』『拾遺和歌集』『春色梅児誉美』『炭俵』『通言総雑』『徒然草』『東海道中膝栗毛』『莫切自根金生木』『蕪村集』『平家物語』については『日本古典文学大系』『新日本古典文学大系』に拠った。
また、以下の作品の引例は(一)内に拠った。

『浮世床』『四十八癖』(新潮日本古典集成)、『八笑人』(滑稽文学大系集)、『絵本江戸風俗往来』(東洋文庫)、『鼠小紋東君新形』(黙阿弥全集)、『鐘権三重帷子』(近松全集 十二)、『仮名手本忠臣蔵』(日本古典全書 竹田出雲集)、『粟田口露笛竹』(円朝全集 三)

一 虎溪の橋

「廬山記 叙山北」虎溪三笑の故事に基づく。晋の慧遠法師が廬山にいた時、訪ねてきた陶淵明、陸修静を送りながら話して夢中になり、いつもは渡るのを避けてきた虎溪を過ぎて、虎の声で始めて気づき、三人で大笑したことになる。桜川慈悲成作『滑稽好序』寛政十三「十橋に三人笑ひしを虎溪の三笑とかいへり」。なお三笑亭可楽については暉峻康隆一九六五『舌耕文芸史』(『国文学研究三三』)以下の記事がある。「山口又五郎というひいき客が山生亭花樂という芸名はどうやら生花の師匠めくから改名したがよからう。ついでには中国の虎溪の三笑の故事に拠つて、三笑亭可楽というのはどうだらうといわれ、江戸に帰つてから三笑亭可楽と改名したと三馬が可楽から聞いた話を「中興采由」に述べている。」

前出暉峻康隆一九六五によれば、三笑亭可楽は当時中橋上楨町に住して、文化十一年頃までせんべい店を営んでいたことが知られる。

同作者『種がしま』文化八 奥付には「中橋三笑亭可楽」とある。

三 基緒の辯

広げてみせびらかすこと。

四 武蔵鎧石流

(に)『伊勢物語 第十三段』―「むさしあぶみさすがにかけてたのむには、とはぬもつらし、とふもうるさし」「あぶみ」「さすが」とも『いさみにつき馬』題名にかける。

五 百韻

連俳形式。連歌、俳諧における基本的な作品形態で一〇〇句を一巻とする。(俳文)

六 金響

「武蔵鎧さすがに」と同様、「つき馬」にかけた語。他の者を自分の自由にする金の力。

「河竹黙阿弥『鼠小紋東君新形』安政二初演―「いくらびんしやん刎ねようと、金響で座敷を引かせ、今に手活の花となし」

ふで。もと、鳥の羽でつくつたため。

七 翰

八 染手綱掻線

いろいろな色を染めつけた馬の「染手綱」と「翰を染め」を懸ける。近松門左衛門「鐘権三重帷子」享保二初演「稽古に心染手綱掻い線り」に拠るか。

九 踏々と

堂々として歩く。よろめく。

〇 風雅でもなく間雑でなく…竹田出雲『仮名手本忠臣蔵 第九』寛延二初演―「風雅でもなく、しゃれでもなくしやう事なしの山科に由良助が侘住

二 中橋

居」。談洲楼馬作『詞葉の花』寛政九―「親父や番頭に知れては悪いから、世をしのぶかくれ里。仕様事なしの山科屋へ尋ねて行こふ」

二 木幡の里

京都府宇治市北部の木幡から京都市伏見区深草にかけての旧称。『拾遺 一二四三』—「山しなのこはこの里に馬はあれどかちよりそ来る君を思へば（柿本人麻呂）」
中国の漢の時代、長安にあった花柳街の名から、にぎやかな街、遊郭のことを指す。

三 章臺

楊柳を折留（つと）公子の白馬で 吉原は初期、馬で通うこともあった。「寛文元年以前の吉原通いの乗り物は、船と馬がもっぱら利用された。「白馬をもつて上としたるも、この頃白き色の流行なれば」とあり、吉原通いの貸し馬も白馬の方が料金が高かった。」（中野栄三『遊女の生活』昭和四

一 附馬

一 附馬

は桓公に従って狐竹君を討伐した。行きは春であつたが、帰りは冬となつた。迷つて道がわからなくなつたが管仲は「老馬之智可用也」と老馬を放つて先に行かせ、道を得た。」ことに拠る。馬を放つと文中の附馬を懸ける。
遊郭などで客が勘定不足であつたり、不払いであつた際、その勘定をとるために客に付いて行つて不足額を受け取る者。

四 長堤八丁

与謝蕪村作『夜半楽—春風馬堤曲』安永六「故郷春深し行々てまた行々 楊柳長堤堤漸くくだれり」土手八丁とは日本堤の異称。

二 居續

式亭三馬『浮世風呂 前上』文化八「鉄炮へ沈むと附馬（つきま）がうるせへはな」
遊里で二晩以上遊興を続け、帰らないこと。
曼亭鬼武作『一雅話三笑』—「この頃、息子一刀屋といふ女郎屋にて、居続けゆゑ、迎ひをやつてもく帰らず。」

五 御嫌

して女性、特に遊女がいうことば。

三 耳小籠

他にかこつけて悪口、あてこすりをいうこと。
西鶴作『好色一代男三』天和丁「一口咄しにも、人の耳こすりて」

六 源三位

源頼政、源三位入道。伝説では紫宸殿でヌエを退治したという。

七 馬曳向よ郭公

芭蕉『奥の細道』那須原—「野を横に馬曳き向けよほと、ぎす」

三 北鷺子

三田北鷺。「畫家なり。北齋の門人にして、葛飾氏を称す。江戸京橋に住す。抱亭と号し、

八 管仲雪（に附馬を放つ）

韓非子説林にある「管仲と一行

狂歌摺物及び読本類を畫く。」（澤田章編『日本畫家大辞典』大止）

三 北風に(いななく) 魏武帝 苦寒行「胡馬嘶北風、越鳥

巢南枝」(大漢和)

四 不感稻舟

『古今集一〇九二』「最上川上れば下るいなふねのいなにはあらずこの月ばかり」「稻舟の

否にはあらずしばばかり」から、条件付きの肯定を表す。「承知したがしばらく待つて欲しい」の意と「否にはあらず」で、作者が選筆を

詫びた辞であろう。二世荻江露友の「稻舟」に

関わるかと思われるが詳細不明。談洲樓焉馬撰

『無事志有意』寛政十「いけすかねへといへ共余りたび重なれば、いな舟のいなにはあらず」

五 鷺高

六 麒麟

歩みののろい馬。「鷺馬は伯楽に会わず…」想像上の獸。雄を麒、雌を麟。「鷺高も麒麟に立歸」は「麒麟も老いぬれば鷺馬に劣る」よりか。

七 伯楽

「莊子 馬蹄」などに見える中国春秋時代にいた馬を見分ける名人。転じて、よく馬の良否を見分ける者や馬牛の病気をなおす人というが、ここでは馬に十念を授ける方丈を指すか。

同作者『東都真衛』享和四奥付にも「伯楽街遊子 三笑亭可楽戯作」とある。

八 新泉園

「神泉苑に降り立つ鷺に勅命を告げると鷺は地に伏し、帝は御感のあまり鷺を五位に叙した」という能楽『鷺』に基づいた命名か。(新泉園

と神泉苑、五位鷺と悟意鷺丸を懸ける)『鷺』の出典は『平家物語卷五』「朝敵ぞろへの事」、

『源平盛衰記卷二七』「藏人取鷺事」等。

九 悟意鷺丸(五位鷺丸) 「新泉園と号す。通称紀平庄之助。

名は義雄。東都新シ橋畔に住す。五側判者。歌賞に高価の品を出し狂歌界を富にせしは此人なり。文政十年二月歿す。」(狩野快庵『狂

歌人名辞書』昭和三)

一〇 目のまい

一一 ねづみ木戸

「目のまえ(前)」の音訛。無銭入場者を防ぐために狭く作られた劇場の出入り口。鼠のように体を曲げて入るために、この名称が生まれた。

一二 ちうつはら

(中腹)勇み肌の人。俠客。『浮世風呂前上』「目に見えぬ鬼神を隻腕に彫たる俠客も、」

一三 りうきう

琉球使節団の参府は極く稀であったことから、「りうきうだもしれねへ」は「めつたにないことだったかもしれねへ」の意か。「ごうせひにとこがよかつた」は床の間の琉球表と遊女の床を懸けたか。

三四 てつほう見せ(鉄砲見世) 切見世のこと。切見世の女郎は梅毒を病んでいることが多く毒を持つ河豚の異称から鉄砲の名がある。

三三 かの白めん 「白面金毛丸尾の狐」から鳥羽天皇の寵妃玉藻前を指すか。文化四年六月市村座の「三国妖狐伝」が人気をよんだ。文化六年には式亭三馬が合巻『玉藻前三国伝記』を刊行している。

三二 ものまい

「ものまえ(物前)」の音訛。物日の前。掛取りの決算をする日。

三一 なまづぼふ豆(鯨坊主) 「歌舞伎の役柄。歌舞伎十八番の「暫」に出る鹿島入道の異称。」(演百) 「顔面を紅と青で隈取り、丸坊主のもみあげの所に、太白に長髯をつけた扮装。」(前)

三〇 な、つぼふづ

「七つ坊主」 菊池貴一郎『絵本江戸風俗往来』明治三八では七つ坊主の由来を次のように説明している。「三縁山広度院増上寺は：寺領一万五百四十石、実に徳川將軍家御祈願所なり：塔頭三千坊あり、所化寮満ち満ちたり。随つて所化僧の多き子をもつて数えたり。この所化僧等日々の課業終わるや、日暮れ七ツ時：十人二十人ずつ組て市中所々へ托鉢に出

三 七ツ時の時鐘に出かけるにより、市中これ七ツ坊主と唱えたり。」

二九 せきしうりう

石州流。片桐石州を開祖とする茶道、華道の流派。

二八 大雅堂

池大雅。その墨痕鮮やかなること、鬼をも感ぜしむという程の意か。

二七 墨跡感鬼

袋棚の戸。普通ふすま障子とする。原作者『身振嘶寿賀多八景』文化十二：「先だつては二階

二六 ふくろ戸

四〇 こい

四一 三句佐里

四二 こえ(声)の音訛

四三 連歌における去りきらい「三句ざり」をもじつたもの。

四四 大雅堂

四五 墨跡感鬼

四六 ふくろ戸

四七 袋棚の戸

四八 身振嘶寿賀多八景

四九 文化十二

五〇 先だつては二階

の袋戸を大きにありがたふございます。：経師屋が張つてもあのよふにきれいには」

四 ふとわのうちへけんかたばみ 太い輪の中にかたばみ紋を配したもの。

五 にちうとんす

『身振断寿賀多八景』に「す、たけに釜しき梅ばちの中かたうらハもへた、ぬよふな一ト粒鹿の子帯ハ二ぢうどんすの二重まわりをむすばずにちよいとほさみ」と類似の文章があり、おそらく「にぢうどんす（二重緞子）」の意と考ふる。

六 市松つなき

市松模様とも。もともとは石畳とよばれた模様だが、俳優佐野川市松が小姓役の袴に用いたところ女性がござつて小袖の模様にしたほど流行したという。

七 兎ばつち

「初め縮の股引の筒の太くひろいものであったが、のち下方を狭く作つた。江戸には明和年中から始まつたという。」（前）「パッチト、股引ノ名、其意京坂ト江戸ト異ナル処アリ。：江戸ニテハ、縮緬及ビ絹ノ物ヲ「パッチト」云々。江戸ノパッチト、股引ハ、絹ト毛綿ニテ名ヲ異ニスルノミニ非ズ。又縫裁毛異ナリパッチハ背ノマチ上広ク下狭シ。股引ハ上下トモニ狭シ」（守）

五〇 えまのきつねといふ色のたび 「コン」（紺色）とも言えない、のしやれか。

五一 くすべかわ 松葉の煙でなめし革の地を黒くふすべ、模様を白く残したもの。

五二 ばらをのぞうり 細かい緒を何本か合わせた鼻緒のぞうり。『好色一代男三』「仏神に詣でけるにも置綿、ばら緒の雪駄音高く」

五三 ろういろさや 蠟（白）色鞘のことか。黒うる塗りの鞘。「駿河細工の木地白色」、今は絶えて見ねど、古き鏡台、針箱に黒うるし塗の安物あり、それを云へるものなり。（砂）

五四 ならびがおかのおしやう（双岡和尚） 吉田兼好が京都市の双岡に住居したことを踏まえていつたもの。

五五 ひとりともし火のもとに：『徒然草 十三』「ひとりともし火のもとに文をひろげ、見ぬ世の人を友とするは慰むるわざなれ」

五六 かたせからゑのしま（浜地）によれば「江ノ島は古來、江島弁財天女を祀る社」があり、江戸からの参詣客で賑わつたといわれる。

五七 きめうな 明和頃に始まる通人用語ですばらしい、すてき。変わった、おもしろいなどの意。ここではおもしろいはなしの意。『絵本珍宝押』「明和頃」「きれどもくさあらぬ躰。さしもの盗人、がを折てさてもきめうな。そなたはなんとといふ人と」

天そくに 俗に。

五 忠つばら 注三二に同じ 勇み肌や伝法肌の人のこと。

六 附合の席 連俳用語。連歌・連句で前句に付句を詠み合わせること。(俳文)

七 せむじむ

八 めうたる(妙) 注五七に同じ。奇特な人物程度の意。「扇子

壳」天明六頃「兩國へとんだかるわざが出た。

九 壺本竹の曲は妙だ。」

一〇 はんくわつう

(半可通) 通人ぶっているが、本当の通ではない者。「通り者風にしやれちらし、くらまへ小

田原町はもちろん、江戸八百八丁にてみな近

付がほに、けいせいをも相応に買いこなすを

半可と申します。」(砂)三笑亭可楽「十二支

紫」天保三「よしはら通ひのはんくわ通が、

はいふきからおいらが出るやうなほらをふい

てゆくぜ」『春色梅尾簪美 巻七』天保四

「半可通の客は、芸者も或親の秘蔵娘なるこ

とを思はずして」

一一 五風

(…十雨) 五日ごとに一度風が吹き、十日ごとに一

度雨が降る意。天候が順当なさま、転じて世

の中が太平な事。「浮世風呂 前上」冒頭「五

日の風静なれば…十日の雨穏なれば…」

一二 ふじねすみ

藤色がかつた鼠色。紫色を帯びた淡黒色。 筆記体のオランダ文字のようすから左から

右へくると巻きからみ合う字や模様をさ

していう。

十三 中がた

の対。(前)

十四 す、竹

十五 かんぜ水

十六 能楽観世家の定式紋だったが四代目沢村宗十

郎が「小間物屋弥七」の役で着てあたり、彼

の人氣も手伝って流行したといわれる。(文様

「オランダ語 EMBROIDERY でインドのモゴルより織り

出した織物の称。絹糸の経に金糸の緯を織り

こんだ特殊の織物。)(前)

津村宗庵「譚海寛政七」もうるは国の名也、

緞子と繡珍の二品に似たるものなり。…五色

の糸を用いて織。飛金をあしらいたるを金も

うるという」

魚子織りの略。数本ずつの縦横の糸を平織り

にしたもので打違いに粒状の織り目がある。

山東京傳「通言総論」天明七「下着はみな黒

な、このうらゑり」

紋所を菅糸で刺繍すること。「春色梅尾簪美

巻六」天保三「上着ははでな鳴七子上羽の蝶

の菅縫紋」

十七 かましき梅ばち 紋所の名。六つの輪を組合せて梅の花をか

ニハ女モコレヲ用フレドモ、略服ニハ釜敷形ノ梅ヲ用ヒシコトアリ」とある。

七三 トつぶかのここく小粒の鹿の子(絞り)。

尚書画のくわい席 文人墨客が集まって、話を交わし、即席の筆を揮って相互に楽しみあう会合だったが、化政期以降は参加料を目当てにした、酒肴を主とした懇親会的なものへと変わったといわれる。

七五 京傳や三馬

山東京傳(宝暦一―文化二三)と式亭三馬(安永五―文政五)のこと。なお、三馬と可楽は互いを自己の作品に実名で登場させるなど、親交があつたことが伺われる。

七六 しやりん玉

一生懸命ですること。現在では「大しやりん」が多く使われている。
むやみとやたらに。

七七 こくう

片はしだけ心得ていること。なまかじり。

七八 まさき(巻)

俳諧・雑俳用語。狭義には百韻・歌仙などの完成された作品をいう。(俳文)

七九 けい物

景品のこと。俳諧で点取の際の懸賞品を言った。

八〇 ふねい

(不佞) 才知・口才のないこと。転じて男性自称代名詞。医者・学者・文士などが使つたといわれる。和来山人作『落断顎懸鎖三』文化九

八二 仲町

では、気取つた藪医者が「さやうく、不佞は絵にいたしましたじや」とつかつている。
江戸深川の町名。仲町(深川)とは富岡八幡宮の別当寺である永代寺門前仲町(現在の門前仲町一丁目)の略称。

八三 あついたの

とつかり形 厚板は絹の練糸を縦に、生糸を横に織つたもの。とつかりはアイヌ語のおつとせいを指すが、ここでの意は不明。

八四 ちゃんば

(占城) インドシナ、南ベトナムにあつたチャム族の国名。ちゃんば織の略称にも用いられるが、ここでは鮫皮の一種の意。

少し長くなるが、刀の様子を説明した田朝作品を以下に引く。

三遊亭内朝「粟田口露笛竹」初演年不明―「鞘は別に念の入れやうは有りませぬ紺色で、丸線形見入れ白に成つてをり、淵頭に赤銅七子で金の二疋の狂ひ獅子、目貫は横谷宗取の一輪牡丹に鏝は信家でございます。鮫は占城の結構なところ、柄糸は煮紺三分に巻き揚げ立派な物でございます。」

八五 ぶちかしら

(縁頭) つかがしらのこと。注八四参照。「ぶち」「ぶち」の清濁は不明。

八六 花かいらぎ

東南アジア原産の鮫の皮。あらい地粒の中に花形の大粒が混じっている。刀剣のさや柄を

『通言総鑑』——「花か
いらぎのわきざし。かみはよし原ほんだ」

八七 おもしろ山のもと、ぎす 何々山という通人用語。(注一)

〇〇「ありがた山のも同様である。『身振
嘶寿賀多八景』——「これはこみ山三丁目だの」
十返舎一九作『東海道中膝栗毛 四上』文化二
——「宿はどふでもい、からたほのありそふな
内にしやれ、」の「のみこみ山く」

八八 みやうけん

妙見堂 「柳島橋の西詰、日蓮宗妙見山法性
寺の境内にある。俗に柳島の妙見様と呼ばれ
る。」(浜地) 『春色梅屋簷美 卷一』——「今朝は
妙見さまへ参りに来たつもりで宅を出ました
ヨ」。龜のがくは未詳。

八九 てやい

「てあい(壬辰)」の音訛。(前)では「あいて
」(相手)の倒語という説がある。
十返舎一九『臍煎茶吞嚙』寛政十一——「おなじ
万八ばなしのすきなてやい、けふもこ、により
あつまり」

九〇 大おん寺まへ 下谷竜泉寺町にあった大音寺の門前をいう。

『通言総鑑』——「蚊はねへかのと、大音寺前の
どぶじヤアあるめへし」

九一 おちが

結果が。挙句が。
未詳

九二 鷄舌楼

枕橋のたもとと水神の森にあった幕末の有名

九三 八百松

な料亭(浜地)。『粟田口露笛竹』——「向島の土

手伝いに帰つて参りますと……たた今は八百松
という上等な料理屋ができましたが、その時分
あの辺は嬉の森といひまして、樹木が生い茂り
て薄暗うございます。」

九四 イヌといふ字が 似て非なるものの接頭語として用いる。

イヌタデ、イヌイチゴなど、多く草木名に用い
るか。

九五 栄三

歌舞伎役者 尾上栄三郎(尾上梅幸の前名)。

嘉永二年に六十六歳で没した三世菊五郎が初世
栄三郎を名乗っており、該当するか。

九六 源のう

式亭三馬『浮世床 初上』文化十には、「源之げん
のう松助、真つ平御免」とあり、本書の「源の
う」と『浮世床』の「源之」は同じ沢村源之助
のことを指すと思われる。源之助は和事の立役
で文化八に沢村宗十郎を襲名しており、文化六
の本書成立時は最盛期と考えられる。

九七 梅花のあぶら 梅の花に似た香りのする水油。ごま油の中

へ龍腦・麝香・丁子などをあわせたものを加え
てつくった頭髪用の香油。

九八 酒といふつはもの 出典未詳。

九九 下戸ならぬこそ 『徒然草二』——「声をかしくて拍子とりい

たましうするものから、げこならぬこそおのこ
はよけれ」

一〇〇 ありがたい山 「ありがたい」の意をしゃれていう語。

近世主に江戸でおこなわれた。「有難山」に「時鳥」の他「寒鳥」「鶯鳥」「宝心丹」等を添えた。また「有難山吹……」「有難山猫」なども使われた。司馬龍生作『新作昔言はなし』弘化三丁「きみが代や、ありがたいやまの古たぬき」

一〇一 松坂じま

松坂付近で織り出される縞木綿。江戸時代商家の使用人の仕着せなどに用いた。「江戸ハ結城島ヲ第一トシ…蓋京坂モ河内モメンハ最下ノ服ノミ、丁稚等仕着ト名ケ、戸主ヨリ給フノ服ニ用之。江戸ニテハ仕着セニ松坂島ト云テ、勢ノ松坂織ヲ専ラトス。松坂島ハ美ニシテ久ク堪ヘズ」(守)「勢州松坂にて織出す木綿の、縞ある地太の木綿は、丁稚小僧の仕着なりしなり。三河木綿と同じく強き木綿なりと云く」(砂)

一〇二 いわつきこくらの帯

岩槻木綿は地質が強く暖簾、風呂敷等に用いられる。小倉帯は普通使用人、職人の男帯として用い、白地・紺地が多いといわれる。

ここでは治助の実直さを描く小道具の一つとして使われている。

一〇三 いわへて「ゆわえ(結わえ)て」の音訛。

一〇四 せうりやうさま せうりやう／しやうりう／せうる。「招

留」ならば「せうる」が、「精霊」なら「しやうりやう」のかな遣いが正しい。「精霊」と

登場人物「招留」を言い間違えてはなしを混乱させた。

一〇五 大坂喜八

未詳。

一〇六 川口

この場合の川口は川口善光寺のある、川口ではなく、おそらく、川口橋か。川口橋は「中洲の三ツ俣へ流れこむ浜町堀の川口にある橋」(浜地)のことである。

一〇七 王子から二り

川口は日光街道の駅で江戸より三里十五町のところにある。(浜地) によれば川口善光寺は江戸から船便があるので参詣客も多かったといわれる。

一〇八 やげんぼり(薬研堀)

東京都中央区日本橋の両国橋西詰付近にあった橋で、御米蔵築地移転にともない、明和八年には埋めたてられたが、その名は付近一帯の地名となった。この地にあった不動尊は薬研堀不動といわれ縁日の賑わいは江戸屈指であったといわれる。

一〇九 三みせんひきの可良 河東節の三味線弾き山彦可良のことである。

△山彦可良▽「本郷菊坂生れで、本郷日蔭町に住したのち両国薬研堀に移った」(『新撰大名辞典』昭和十三年目可良(文化十一年歿)のことか。

二〇 どうりで…善光寺様が 治介が誤つて言つたのは、荒川に臨む川口村渡し場北にある「川口善光寺」。「虎の門外の京極家の金毘羅神、新橋の外京極家の邸内にある。…一般の参詣を許すようになつたのは文化の末で、金毘羅大権現として創建してからのことであつたらしい。」(浜地)

本書が書かれた頃はまだ、登場人物らの参詣は許されていなかったかと思われる。

二三 横山町の魚文 魚文については五昇亭花長者「江戸食物 独上戸案内」慶応二「御料理」の項に「御料理 高や新道 魚文」の名がある。高や新道は不明。

慶応二年の魚文と本書のそれとの関係は不明。横山町は中央区日本橋のものか。同可楽の作品、『身振斬寿賀多八景』文化十一にも「九ツ過ぎまで魚文にのんで居たア」とあり、実在の店であろうか。

二四 金を二ツ切れ 一分金を数えるのに用いる。枚または個の代わりに使われる。式亭三馬『四十八癖一編』文化十には「何の何がしかいふ料理茶屋へ往つて見さつし。おれ一人りでも二分や三歩はまた、く内だ」とある。当時の金二切れ(二分)は料理茶屋の一人分費用。

二四 りやうり茶屋 文化期以降、江戸に現れた即席料理の店。

客の人数に応じて簡便にみそ吸物、口取り肴、二つ物、刺身、澄まし吸い物あるいは茶碗物、最後に一汁一菜の飯を出す。本格的な料理屋から者売屋に近いものまであつた。(新潮古典集成『浮世床 初上』頭注)

二五 おつりき

「りき」は「おつ(乙)」にしゃれて添えた語。普通と違つて一種のしゃれた情趣があること。土橋亭りう馬、扇好作『巨面相仕方なし』天保十三「なんでもあいつはおつりきだ、ヤレおめへさんはしよけへのやつじやねへ」

二六 おてへぎ

「おたいぎ(御大儀)」の音訛。滝亭鯉丈『八笑人 初二』文政三「てへぎながら例の所へ」

二七 ゆうきもめん 結城地方で産出された木綿織物。

二八 ひろ袖 袖口を袖丈いっぱいに開いた袖。

二九 めくらじま 結城織の衣類に小倉の帯、盲縞に真田の紐の前垂れというのは当時商店の番頭の最も一般的な様子であつたことが『絵本江戸風俗往来』に描かれている。

三〇 両こくの亀や「亀や」は不明。両国橋の東詰、西詰はともに繁華な場所であつたが、ここでは西詰の両国広小路(日本橋)を指すか。

三一 ねずみのはんくつ「半沓」革足袋。足首より上までの筒の

あるものに対して半という。鹿のなめし革作りに染色したもので足袋の上からでも穿く。

二二 ふじくらぞり 藤倉ぞり。「麻裏匭、上精製ノ物、二百五六十銭。此草履ノ麻裏ヲ不用物ヲ藤倉草履ト云。価五六十銭」(守)

二三 そろばんしほり 算盤玉をならべたような形。手ぬぐいの柄に多く用いられた。

二四 向じまにゐんきよしていた (白猿)五世市川団十郎の俳名。

二五 ヘエツて 「はいつて(入つて)」の音訛。

二六 へへけへ 「はいかい(俳諧)」の音訛。

二七 ラツコロやすふ ラツコロは「おころ(心)」の音訛。お心安く。

二八 しッみのつゆでも 蜷は昔から黄疸の薬とされるがここでは錦川の黄色い声を揶揄している。

二九 此人而有此病だ 『論語』雍也の「伯牛有疾。子問之。斯人也、而有斯疾也」から。ここではどんな人でも病(天執心)の一つはあるというくらい

の意。

三〇 さんきらい 「さんきらい(山帰来)」の音訛。ユリ科のつる性低木。地下の塊根を土ぶくりようとい

瘡毒の薬にする。貝原益軒『大和本草六』「土ぶくりよう中夏より来る。白きを良とす。

国俗是を山帰来と云。能悪瘡を治す」

三一 一つ目：天神 とともに遊女の格。ここでは、連歌の点取り

と、宗匠の順位をこれになぞらえたものである。

と。天神は太夫の次位で揚代が二十五奴からはじまる。唐菜参和「莫切自根金生木」天

明五「明神の百枚も天神の五十枚も一つ目の七十枚も」

俳諧師。安永五ノ天保一岡野重成、別号野雀。常陸国水戸藩士岡野重寿の次男。三世湖中。

(俳諧)。東博本では「湖十」の後入れがある。俳諧高点付句集「五万才」の撰者俳文

甚だしい、ひどい、強い、すばらしい、などの意味があるが、ここではすごいものだが程度

の意。ホコ長『新作徳盛噺』寛政一「アノてんま丁のだし、しうげつとやらのがさいくだそふだが、きついもんだ。」

二二 つけへた 「つかれた(疲れた)」の音訛か。

二三 ぐわんにんぼうずの初山じゃアねへが 願入坊主は僧形の物乞い、初山は年頭の山仕事

の仕事を始めの行事。不体裁な様子か。

二四 はてへて 「はたいて(叩いて)」の音訛。

二五 土手でいもをやいてる 当時江戸では焼芋が流行した。「江戸ニテハ：焼甘諸ヲ専ラトス。：阡陌番小屋ニテ賣之。価京坂ヨリ賤シ」(守)

『浮世風呂 三下』文化九では当時の流行を「今

年は琉球芋おさるが沢山な所為か焼芋がはやりませよネエ」とある。

三九 梅若さま

墨田区木母寺にある梅若塚のこと。謡曲「隅田川」で有名な梅若塚があり、参詣をかねた行楽客でにぎわったといわれる。

四〇 たほ

若い女や芸者等をさして「たほ」という。

十返舎一九『東海道中膝栗毛 初享利一丁、たほでもあつたら、此むすこをだしぬくめへよ』

四一 梅かゝに

芭蕉『炭俵』元禄七「むめがかにのつと日の出る山路かな」

四二 六七のかや

縦横がおのおの六幅、七幅の蚊屋。六畳もの。蚊帳に関する咄は多く、「チヨソ、ふけへきなかやだぞ。…ほうらい山とやらを見たやうだ。つると蚊めがまふは」(土橋亭りう馬・扇好作『百面相仕方ばなし』天保十三)というものもある。

四三 だちう

ダチヨウのことか。鳥ならば、仮名違い。ただし、江戸の見世物の中には、「ロバ、鸚鵡、孔雀、ダチヨウ」等の舶来のものが人気を集めたことが知られている。

四四 芝居のでんぼう「無銭二見物スル人ヲ云。今モ芝居ニテハ

四五 どけいでも

斯云カ。今俗ハ多ク「デンボウ」ト云也(守)「どこへでも」の音訛。

四六 おきてみつ

「おきて見つ寝て見つ蚊帳の広さかな」伝加賀千代女(元禄十六)安永四)作。

四七 うなぎ屋

「古ハ鰻蒲焼ト云名ノアルハ、鰻ヲ筒切りニシテ串ニサシ焼キシ也。形蒲穂ニ似タル故ノ名也。今世モ三都トモ名ハ蒲焼ト称スレドモ其製異ニシテ名ニ合ス：大小トモニ串ヲ異ニシ一皿価二百文……江戸ハ専ラ鰻一種ノ店ノミニテ他物ヲ兼ズ」(守)

四八 あゆびやな

「歩ぶ」(自バ五)行く。赴く。命令・勧誘に用いるのが普通。「あゆびやアがれ」「あゆべ・あゆびな」「あゆびや・あゆびやれ・あゆばつし」などと使われる。談洲楼馬馬「詞葉の花」寛政九「わりやアどふするつもりだ。ヨ、サ。なんでもおれしたにしてあゆびやれ」墨洲山人「新玉簪」寛政十「ヨ、それならばあゆばつし。アイ。いきやしやう」

四九 なまが一本

なまゝ現金を云。初めは芝居通語であつたが寛政より一般化した。(三好)一本〃一文または四文銭をつないで銭差し一本の意で百、または四百文のこと。(守)の巻五「鰻屋」では「江戸ハ：一皿価二百文トス。必ス山椒ヲ添

「へタリ」とあり、ここでは、四百文のことである。

一五〇 うをも北うらのうをで 北うらとは霞が浦の東岸。鰻蒲焼

は江戸前を最上として、他所で獲れた鰻を旅鰻といつて一段軽く扱った。本文も、江戸前の鰻ではなく、一段品質が劣つたものとして「北うらのうをで」といつたものである。

「江戸前と旅鰻ということについては平賀源内の中にも…書いてありますから、大分前から言つたものと見えます。…この江戸前という言葉が宝暦以来鰻のために繰り返されていゝる。江戸前という言葉は、鰻によつて出来たのかと思われるぐらいであります。」（『三田村鳶魚全集』）「天麩羅と鰻の話」
「すけねいが」。「すくない（少ない）」がの音訛。

一五一 びせいさん 「みせい（未醒）さん」に同じ。

一五二 おもて（うら）連歌、俳諧で二つに折つた懐紙の表と裏。またそこに記した句。一卷三十六句のものでは懐紙を二つ折りにして第一面に六句書いてこれを「表」六句といい、以下の二二句を裏面に書いて「初裏」という。（俳文）

一五四 執筆 会席において宗匠の下で連衆の出す句を懐紙

に書いて記す役。単に句の記録だけでなく句の指合の有無などを検討して宗匠の裁定を助け一座の興を高めて滞りなく興行を終えるよう司会する。（俳諧）

一五三 ぬいそう（詠草）詠作した和歌や俳諧。またそれを書きつけた草稿。

一五四 春秋は三句つゞく 連歌・和漢連句・俳諧等では、単調、冗漫を避けるため、様々な連続の形式、隣接忌避の定まりがあつた。

一五五 ずだ（頭陀）頭陀は梵語。行く先々で食を乞いながら伝道修行すること。（三好）

一五六 つかねんなつからしゆもくをもつて 『京鹿子娘道成寺』の「鐘入り」で鐘を引き上げると白拍子が蛇体の鬼女（＝般若）になつて現れる場面から「行脚」と「般若」を懸けて言つたもの。

一五七 かうじ町のけだもの屋「江戸ハ麹町ニ一戸アルノミ。…三都トモ獸肉賣店ニハ異名シテ山鯨ト記ス」（守）
一五八 鹿のことをもみぢ 「三都トモ獸肉売店ニハ異名シテ山鯨ト記スコト専ラ也。又猪ヲ牡丹、鹿ヲ紅葉ト異名ス。」（守）

一五九 なんぶん 「なにぶん（何分）」の音訛。

一六〇 道哲 土手の道哲ともいい、浅草鳥越橋南の橋話にあつた弘願山専称院西方寺のこと。

一五三 高尾のお寺 前項西方寺は吉原に近いため、新吉原の遊

女の投込寺となり、また、二代目高尾大夫の

墓があるといわれるのでこの名がある。

一五四 火なほ箱

火繩に火をつけて入れておく引出し付きの木箱。船中で煙草の火を付けるのに使う。

『客衆肝胆鏡』京伝作。：舟やどのかみさんの

画には火繩箱下たる図あり。此箱元來火繩入れ

の為に作られしにあらじ。舟頭の手提用箱なり。

今の手提金庫同様のものなり。火繩を引出しへ

挟み置く。便利ゆへ。』(砂)

一五五 ときわづ

常磐津節のこと。「宮古路豊後掾の高弟文字大夫が延享四年に独立して常磐津と称したこと

に始まる。主として歌舞伎の舞台に出演し、多

くの傑作を残した。」(江戸学)

一五六 あたな

あだ(婀娜)な。『通言総離』—「長崎屋でぶんきようさんが、おひろめなんしたのでおす。いつそあたで、ようすよ」

一五七 とみもと

富本節のこと。「宮古路豊後掾の高弟初代小文字大夫が寛延元年に独立したのをはじまりとす

る。二代目豊前掾の美声で一世を風靡したが、

後統の清元節に押されて衰退、幕末ごろにはそ

の生命力は失われたといっている。しかし一時

は流行をさわめ江戸城大奥の女中の採用資格に

富本の教養が問題であったほどである」(江戸

学)

一五六 かさいと申ても。：かさい(葛西)は地名。「恋」と「下肥」

にかけたもの。「江戸で排出される糞尿は周

辺の農村で使用する重要な肥料であった。：

この下肥を収集するのに西部農村は馬、東部

から北部にかけて河川輸送路の発達したところ

では、舟が使われ、俗にこれを葛西舟とい

った。古川柳でも「葛西船堀へ付るもこひの

道」等の句がある。」(江戸学)

一五八 山のいもがうなぎに。山芋が鰻になるとい俗言は当時

広く、流布していたようで、『浮世風呂』前上

にも田舎者のはなしの中に現れる。

一五九 三ツ物

三品の組合せ料理。料理茶屋では吸い物、口取り、二つ物、刺身と続く。

一六〇 なんきんの五すのはち 呉須焼。中国明朝末から作り始め

た染付け焼きの陶磁器を言うが、江戸時代は

庶民の生活具であつたらしい。談洲楼馬房

談洲楼銀馬作「富久来多留」文化十一「江戸

もの、あり合具主茶碗おつとり酒をつぎ呑む

といへば亭主、：イヨ咽(のど)の守春(のみ)つ

ね公」

一六一 なるどだい 鳴門鯛 鳴門海峡の鯛はとくに味がよいこ

とから、真鯛を称している。

一七三 ふきみそあい 落味噌和え。

一七四 くま坂長半の 牛若丸に討たれた盗賊、熊坂長範のこと。

ここで、「せうろといふやつアたんてくうと

口が松やにくさくなつてなんの事アねへくま

坂長半の」とあるのは、熊坂長範が美濃国

にある大木の松にのぼつて、東西を遠望し、

部下に旅人を襲わせたというはなしに拠るか。

一七五 夕立にあつた山伏： 夕立にあつた山伏が法螺貝を頭に

かざしたところから「かいかぶり」と地口を

言つたものか。

一七六 くらまへの天王ばし 蔵前通り鳥越橋俚俗名。(浜地)

一七七 ひゞやき 陶磁器の焼き方の一つ。釉に細かいひびをあ

らわすように焼くこと。

一七八 たい師さま 山下に近い大師としては上野両大師のこと

である。両大師をまつる両大師堂は寛永寺

御本坊に隣接し、慈眼堂又は、開山堂といわ

れた。「ここから出す角大師・豆大師といわれ

る慈恵大師の影像を刷つた守札は魔除けとし

て家々の戸口や雨戸などに貼られた。」(浜

地)

一七九 山した

名称は東叡山の下にあつたために山下と呼ばれた。見世物や土弓場などが設けられ上野広

一八〇 こながら

小路とともに繁華な場所であつたといわれる。(小半)四半分の意。一升の四分の一、すなわち二合五勺。(前)「二合半」と書く時も。

馬雄作「雅興春の行衛一瞥見城」寛政八「独り

住みの働人：命也けり小半酒、ごまめは金平

せはいらず」。『浮世風呂三上』——「例所へ行

てももんどいで四文二合半ときめべい」

一八一 けふら 今日等。(らは接尾語今日あたり。今日なんか。

一八二 せうるさんの御ちそうなら： 「招留」と「精霊」の地口

から、精霊のご馳走ならば、蓮葉の飯でもす

ればよいの意か。

一八三 おこるへへけへ久しからず 「おこる平家久しからず」に

懸けた地口。

一八四 ちうの字をならべ 「中つ腹を並べ」に同じ。太平楽・大

言壮語を吐くことを言う。

一八五 く、りずきん 頭の形に合わせて丸く作り、縁を括つた頭

巾。老人用。(前)

一八六 釜じめ 毎月晦日に、巫子などが民家をまわり、籠の

御払いをして、しめ縄をはった。またはその

人を指している。

一八七 お玉が池て： お玉が池 「神田浜町絵図には、神田川

に架かる和泉橋の南方、松下町一丁目代地の

一角に「玉池イナリ」とあり、傍らに小さな

池が書かれている。神田お玉が池というのがすなわちこれである」。(江戸学) この池の付近には、当時有名人が多く住んでおり、文化入らによつて様々な会が開かれていた。

一八八 葦酒不免山門入 多く禅宗の寺の門前に立つ結戒の一つ。
「不許葦酒入山門」と立つ。

一八九 こくぼたん 牛の異名。「唐劉訓者京師富人、春遊以牡丹為勝賞訓邀客賞花。乃繫水牛累百于門人指曰、此劉氏黑牡丹也。」(諺語)

一九〇 猿をよふこ鳥 「よふこ鳥小鳥の友をよへは也又猿を云といふ説有」(里村紹巴『匠材集第二』慶長二)

一九一 こちかぜを…こむそを… 共に出典未詳。

一九二 梅を好文木 中国晋の武帝が学問に励んでいる時は梅の花が咲き、学問を怠つた時は散りしおれたことが「晋起居注」にあるとの故事から梅を好文木という。「梅の異名。晋起居注、晋武好文則梅開、廢学則梅不開」。(諺語)

一九三 てんげへな 「たいがい(大概な)」の音訛。

一九四 せうべへ 「しょうばい(商売)」の音訛。

一九五 とをりもの 通人、粋人のこと。

一九六 めかり 氣を利かせること。場所を見定めて機転をきかせよ、わきませよの意。

一九七 こかア 「(こ)は」の音訛。

一九八 すじけへ 「すじかい」の音訛。すじかいに。斜めに。
一九九 すげえぶんがわるい げえぶんは「がいぶん外聞」の音訛。いささか外聞がわるい、の意。

二〇〇 らしやうもん 羅生門河岸。「新吉原をめぐる絵堀に面した場所の一つで京町二丁目の南にある河岸をいふ」(喜多村信節『嬉遊笑覧』文政一三)

羅生門河岸の名は茨木屋という遊女屋があったから名づけられたとも、下等の女郎が客を離さないさまを鬼にたとえてともいわれる。

「いずれも頼光四天王の一人、渡辺綱に退治された羅生門の鬼茨木の故事に懸けている。」

(浜地)

二〇一 やみと

むやみに。やたらと。しきりに。『わらひ鯉』寛政七「いなかはぞろつへいでおもしろい。

やみという事ができる。」

二〇二 いつきんく やなにか 一斤とは酒一升のこと。酒肴として、台のものをとることを言ったか。『東海道中膝栗毛 三下』文化元「マアひらのちう

さんなら、片じまいで壺分式朱、茶屋が壺分か、芸者が一トくみで又壺分、そして一斤でもとれば、その代が貳百ツ、かゝるぶんのことぞ」

二〇三 でいりよ 「でいり(出入り)を」の音訛。

二〇四 わりをつけて 仲裁をつけて。

二〇五 こなた こなた此方の意。あなた、お前。『無地志有意』

—「コレおりんどん。こなたに無心が有く」

二〇六 ふしやう 不肖・不承 不満足だがそれで我慢すること。

辛抱する。十返舎一九作『東海道中膝栗毛 五

上』文化三二「なるほどそふすればよかつた。

不肖してのればのるもの、もふく道中馬

にはあきはてた。」

二〇七 ふなゆうれいをみたよふに：四百かせ 海上に現れ船

をう船幽霊。杓子を要求するが杓子の底をぬい

て貸さないとその杓子で水を掛けられ船が沈

められる。「ひしゃく」と「四百」が懸けられ

る。

二〇八 たてひき けんかや交渉、義理の立て合い等の意に用いら

れるが、ここでは心意気を見せるために支払い

を代わつてやる、用立ててやるの意。

二〇九 けひき 野引きのことか。

二一〇 そけへ 「そこへ」の音訛。

二一一 よくつもつて(みやま) よく考えてもみよ。推量してみよ。

『通言総離』—「よくつもつておみなんし」

二一二 まごが馬をつれて… 附馬を連れてきた吉五郎の仲間の

「孫」と「馬子」を聞き間違えて言ったもの。

以下のはなしの内容はこの聞き間違えから生

じた会話の行き違いを描く。

二一三 十ねんでもをさづけければ 十念はもと浄土宗・時宗で僧が

南無阿弥仏の名号を信者に授けて結縁させる

ことだが、ここでは、方丈がいさみに十念を

さづければきつねがおちると言っている場面

である。

二一四 千部

千部経。または経典千部。ただし、ここでは

千部と附馬に返す金を懸けており、「壹歩程

さずければ」ついている馬ははなれるという

オチをつける。

(手重)ものものしい、容易ではない。めんど

くさい。ここでは、そんな御大層なものでは

ないという程度の意。

原本の翻刻に当たり、閲覽と翻刻をお許しくださつた早稲田
大学図書館に心から感謝申し上げます。

(みはら ゆうこ／文学研究科日本文学専攻 博士課程四年)